



亀松太郎 (電波新聞 特約記者)

産業界の祭典に学生の波

セミコンが仕掛ける「半導体との出会いの場」

約10万人の来場者を集める国際展示会「SEMICON Japan (セミコンジャパン)」。毎年12月に東京ビッグサイト (東京都江東区) で開かれる半導体産業の一大イベントだが、近年、会場に学生の姿が目立つようになった。背景にあるのが、主催者SEMIの「入口戦略」である。業界団体として、若者が半導体企業と出会う場の創出に力を入れている。 (敬称略)

学生を迷わせない「歩き方マップ」

「セミコンはBtoB (企業向け) の展示会なので、学生にとってハードルが高い」。SEMIジャパンで人材開発を担当する下村泰輔はそう話す。会場は広大で、専門用語が飛び交い、商談中心の空気が漂う。企業ブースをどう回ればよいのかわからず、気後れしてしまう学生も少なくない。

そこで、SEMIジャパンは、学生向けの「歩き方マップ」を制作した。いつ、どこで、どんな学生向けイベントが開かれるのかという情報を、手書き風の会場案内図にまとめて、学生が把握しやすいようにした。

「このマップによって、学生の回遊率が大幅に上がった」と下村は語る。また、企業ブースをグループで巡るツアーを実施。担当者が付き添って、それぞれのブースを案内することで、学生が接点を持ちやすくなった。

1700人超の学生が参加「合同企業説明会」

会場の一角では「未来カレッジ」



2025年12月のセミコンジャパンでは、大学生や若手社会人向けの企画として、YouTubeなどで人気の経済学者・成田悠輔氏のトークイベントが開かれた

と題した合同企業説明会も開かれる。半導体関連企業がブースを構え、自社の取り組みやキャリアパスを説明する。

下村がSEMIジャパンに入った2019年ごろは、参加企業が15社程度だったが、25年には58社まで拡大した。学生の人数も、延べ約550人から1700人超へと大きく増えた。

「参加者の4割が修士課程の学生」というのが特徴だ。専攻は、電気電子や機械、材料化学が7割を占める。一方、文系の学生も増えていて、1割を超えた。「半導体業界への注目度が高まっていることを実感している」と、下村は手応えを口にする。

そんな学生たちに向けて、会期中の夜間には「WAKAMONO NIGHT」という参加型イベントを開催。人気論客のトークやお笑い

芸人のライブのほか、半導体業界の若手社員と学生がゲームを通じて交流するワークショップも開かれた。

大学の研究発表を企業目線で表彰

大学との連携も強化している。東京大学や京都大学などの研究室が、セミコンジャパンの会場で研究成果を展示するほか、企業の審査員の前でプレゼンテーションを行い、優れた研究にアワード (賞) が与えられる仕組みを設けた。

企業の担当者にとっては、将来有望な研究テーマや研究室とつながる機会だ。学生にとっては、自らの研究が産業とどのように結び付くのかを体感する場となる。25年は、68の研究室が出展し、33

の研究室がアワードに挑戦した。「学会での発表と異なり、企業目線の評価を受けられるという点に特色がある」と、SEMIジャパンの片山琢哉は説明する。

さらに、半導体企業の経営者や技術者たちが大学のキャンパスに出向いて、半導体の設計・製造・装置・材料といったサプライチェーンの全体像を伝える取り組みも始めている。

だが、課題もある。セミコンジャパンの合同企業説明会の参加者を見ると、電気電子系や文系の学生が大きく増えている一方で、機械系や材料化学系、情報系の学生の割合が伸び悩んでいるという。

下村は「半導体業界は、電気電子以外にも活躍できる場がたくさんある。そのことをしっかりPRしていきたい」と話している。



セミコンジャパンの会場に設置された「学生向け歩き方MAP」。ウェブサイトにも掲載され、学生の案内役となった



SEMIジャパンで人材開発を担当するワークフォース・デベロップメントの下村泰輔リーダー (右) と片山琢哉シニア・コーディネーター